

スラウェシ市民通信(8) -- 自分の体に剣を突き刺す -- ブギスの祭司ピッスの物語 (連載)

著者	Asfriyanto, 松井 和久[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	145
ページ	40-43
発行年	2007-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047080

自分の体に剣を突き刺す ブギスの祭司ビツスの物語

アスフリヤント

●剣を腹部に突き刺して倒れる

その夜、ビツス (Bitsu) と呼ばれるブギスの祭司によって執り行われるマビツス (Mabitsu) の儀礼の最中に、突然、プアン・マトア・ビツス・サイデイ (以下「プアン・サイデイ」) の表情がこわばり、汗が吹き出した。歯をむき出しにしたまま、左手で家の中央の柱をつかもうとする。右手は剣の先を握ったままで、その剣先はこのビツスの腹部に突き刺さっている。別のビツスはそれに驚いた様子。プアン・サイデイは剣を体に突き刺したまま体の向きを変え、祭壇のある控え部屋へ入った。

かなり長い時間の後、プアン・サイデイは控え部屋から出てきた。剣はまだ体に刺さったままだ。彼が半ば強制的に剣を体から抜くと、流れ出た赤い液体がビツスの金色の衣装を濡らした。おおよそ七センチにわたる血の跡は剣の先に溜まり、それを彼がペロリと舐めた。「こうした出来事はプアン・サイデイにはよくあることなんだ。マビツスの儀礼を行う条件が整わなかった場合にはね」と、ビツスについて関心の高

いNGO活動家のアムルラーは語る。

●マビツスの最低条件

この事件が起こる二時間前、パンケップ (訳注1) の中央市場から遠くない家の上では、白い衣装を着けたプアン・サイデイが、儀礼で使う道具やその夜に執り行う儀礼の式次第を忙しそうに確認していた。彼の有名メーカー製の携帯電話が頻繁に鳴る。聞こえてくる話し声からすると、彼はちょっと怒っているようだった。それどころか、電話の相手であるビツスに対してすぐ来るように強制していた。まもなく始まる儀礼にあたって、ビツスの人数という最低条件を満たすために、電話を受けたビツスは馳せ参じる必要があったのだ。

一方、一七歳になったばかりの最年少のビツスであるムハツラムは、部屋の隅で恐縮した様子だった。彼は頭に被り物をするのを忘れ、まだ女性の衣装のままだった。三色のモチ米で筋をつけるときに指が震えた。モチ米の筋をつけるのを間違えるたびに、プアン・サイデイが何度もムハツラムの手を叩いた。同じく部屋のなかにいた最

年長のビツスであるマッセも緊張しているように見えた。彼は窓の外を覗いては、さつきから待っている一人のビツスがすぐに駆けつけて、プアン・サイデイの怒りを鎮めてくれることを願っていた。しかし、待てど暮らせどそのビツスは現われなかった。結局、その夜、すでに約束済みであるマビツスの儀礼は、最低限の条件を満たすことなく、執り行われたのであった。

●マビツスの儀礼が始まる

いつもと違って、彼らは重い表情で我々の面前に現われた。彼らに起こった事情など全く知らない我々は、ゆったりと心地よく座って儀礼を眺めていた。

最初の一分五分間、金色の衣装と長い剣をつけたプアン・サイデイと三人のビツスは、部屋の中央でまわりながら儀礼を執り行っていた。聖なる儀礼を司るなかでビツスの人々しか理解できない一種の古いブギス語であるト・リランギ (To Riangi) 語を使った神秘的なマントラのフレーズが、グンダン (Gundang) と呼ばれる太鼓の響きとともに流れていく。グンダンの響きがさらに



プアン・サイディ率いるビッス集團のメンバー
(ラ・ガリゴ公演資料写真)

速く激しくなると、ビッスの動きは逆に次第に遅くなる。明らかに、ビッスたちがトランス状態に入ったことがわかる。

若いビッスのムハツラムが続いて最初のマツギリ (Mazgiri) の動きを始めた。腰につけた長い剣を抜き、ゆっくりとグンダンのリズムに従う。その剣を手の甲に当てた。何度も強く押しつけるが、その剣は手の甲を傷つけはしない。それどころか、ムハツラムが部屋の中央で転がり、続いてプアン・サイディがムハツラムの喉に剣を突き刺すが、彼の喉の皮膚は少しも傷つかない。プアン・サイディがムハツラムの喉に剣を突き刺す強さは、家の支柱に響く音で分かる。そのときは身震いがした。日頃は女性的なビッスたちがその夜は突然に力強さを見せた。日常生活では物腰が柔らかで、なよよしているという話と違っていた。

●年配のビッスのみが行う儀式

部屋の中央では、マビッスの儀式がまずまず荒々しくなった。次に、若いビッスたちが部屋の隅に引いて、線香が消えないように見守り始めた。線香から出るチェンダナ (白檀) の香りが強くなるなかで、プアン・サイディは次の儀式に移った。「この儀式は年配のビッスしか執り行わない。若い者が執り行うことは許可されないのだ」とNGO活動家のアムルラーが説明する。

プアン・サイディとともに、マッセも一緒にグルグルと回った。プアン・サイディ

は力強く見えた。鞘から抜いた剣の刃が上を向くように、家の床に剣を置いた。そして、マッセがそこに自分の体を落とす。剣を支える木片が音を立てて碎ける。彼はこの動きを何度も繰り返す。実際、何度かは相当に激しく体を落としたのだ。

興奮はさらに高まる。プアン・サイディが自分の喉に剣を刺したのだ。剣先を家の柱に向けたかと思うと、その剣を自分の喉に何度も突き刺した。グンダンの響きはどんどん強くなる。朦朧としたプアン・サイディは、今度は自分の腹部を長い剣で刺した。彼は床に転げ落ち、剣を支える竹が折れた。プアン・サイディはますます荒々しくなった。しかし、彼が立ち上がって腹部に剣を突き刺したとき、彼は目を大きく見開いた。部屋の隅にいたマッセとムハツラムはプアン・サイディの表情をうかがった。プアン・サイディはよるめき、ふらふらと控え部屋のなかに入っていた。グンダンの響きが止まった。観衆の我々は満足の笑みを浮かべて拍手を送った。しかし、プアン・サイディは控え部屋から戻り、腹部に刺さったままの剣先をつかんだまま、血だらけの指で何度も腹部を拭いた。そうだったのだ。プアン・サイディの腹部が流血している。血が流れ出しているのだ。

●南スラウエシのビッス集團

この事件が起こる一週間前、我々はパンケップ県でビッスとその伝統について小さ

な調査を行った。この地域を対象にしたのは、南スラウエシのなかでもかなり影響力のあるビッス集團が存在しているからである。パンケップのビッス集團はデワタ・ビッス集團 (Kedompok Bisu Dewata) と呼ばれる重要な宗教的儀式を司るヒエラルキーの高いビッス集團なのである。このほかのビッス集團はソッペン、ワジヨ、ボネの各県に存在する。ソッペンのビッス集團はビッス・パットウダン (Bisu Patudang)、ワジヨのはビッス・パッドウパ (Bisu Padupa)、ボネのはビッス・マツパカセンゲン (Bisu Mappakasengeng) の名で知られる。これらすべてのビッス集團の頂点に立つ指導者が「プアン・マトア」の称号を持ち、現在は、パンケップ県セゲリ地区にあるデワタ・ビッス集團のプアン・マトア・サイディがその地位にある。

考古学的な観点からみても、過去の南スラウエシにおける王国の構造のなかで、ビッス集團が非常に重要な役割を持っていたことが確認できる。ブルクンバ、シンデンレン、バンタエン、ルウなど、ビッスやその伝統が認知されていない地域にも、ビッスの墓や井戸の跡がみられる。これらの地域でビッスが知られていない背景には、一九五〇年代後半に地方反乱を起こしたダール・イスラーム運動 (訳注2) によって、ビッスが迫害されたことがある。

たとえ迫害されたとはいえ、偽名を使って逃げのびた老ビッスたちは、ひそかにビ



儀式を執り行うビッスたち（ラ・ガリゴ公演資料写真）

ッスとしての活動を続け、ビッス集団の組織構築を図っていた。たとえば、プアン・サイデイは家から追い出され、パンケッブ、ソッペン、ボネと居場所を転々とする経験をした。彼がビッスになったのは二五歳のときで、一九七四年であった。彼は、生き残ったプアン・マトアである故サンロ・サイデイに師事した。これまでの人生で、彼は、とある機関による「懺悔の手術」(Operasi Dohat) という名の「社会病」撲滅手術を経験した(訳注3)。しかし、彼はこの事件から何とか逃れることができた。

ビッスは、その生地である南スラウエシの人々自身から忘れ去られ始めている。しかし、一九世紀のマッテス (Mathes)、現代のペルラス (Pelras)、アンダヤ (Andaya)、ハモニック (Gilbert Hamonic) など多くの外国人研究者の調査研究成果によって、ビッスは再び知られるようになった。彼らが興味を示したのは、ビッスがラ・ガリゴ (La Galigo) (訳注4) の教えを起源とする古いブギス人の宗教の痕跡を持っているからである。そのため、現在に至るまで、たとえばプアン・サイデイのようなビッスは、ト・リランギ語(神のための聖なるブギス語)、ラ・ガリゴ語(古ブギス語、現在使われているブギス語)の最低でも三種のブギス語を知っているのである。面白いことに、多くの研究者は、イスラーム教が知られるずっと前の古いブギス人の宗教の継承とビッスをみなしているにも

かわらず、マビッスの儀礼を多神教の一部と言われたならば、プアン・サイデイはものすごい剣幕で怒る。それどころか、鏡の持つ意味を説明する際、イスラームの神秘主義者(スーフイー)たちが用いる「預言者ムハンマドが神の啓示を受けた光」と同じだというのである。「これは南スラウエシの祖先からの教えとイスラーム教との融合である。同時に、イスラーム教が初めて伝えられたときに慣習法の一部となり、慣習法と宗教とが渾然一体となってシンボライズされ、南スラウエシの文化の一部になつていた」と、ビッス研究で知られるハリリントラル・ラテイフ教授は説明する。

●再び知られ始めたビッス

このハリリントラル教授を通じて、一九九七年にラタル・ヌサという南スラウエシの地元NGOが仲介し、バリ島で、ビッスによる儀礼が初めて公衆の面前で演じられた。それ以降、ビッスは少しずつまた知られるようになり、社会のなかで尊敬される場を得られるようになった。それどころか、プアン・サイデイ自身が演劇「ラ・ガリゴ」公演の一部となり、世界の有名な劇場を巡回公演するほどになった(訳注5)。

プアン・サイデイは、その世界巡回公演で得た謝金をビッスの儀礼のための用具の取り揃えやビッス自身に関わる儀礼の実施費用に当てた。後者には、たとえば、ある人がビッスになるための儀式を含む。「私

自身は恩師からマッパレバ (maparaha) の儀式を受けたことがない。マッセもそうだ。ムハッラムは儀式を受けた。費用はラ・ガリゴ公演の資金を使った」と言う。

伝統に基づく、一人のビッスは一人の弟子を持たなければならず、その弟子には特別な教育を授けるのである。プアン・サイデイの弟子であるムハッラムに対するマッパレバの儀式は、約五〇〇〇万円ビア(約六二万円)の費用をかけて、二〇〇一年に半月間にわたって行われた。

「昔、まだ王国の時代には、ビッスは王国から与えられた自分の土地を持っていた。その土地からの産物でビッスは生計を立てていた。でも、今ではそうした土地はもはやないのさ」とアムルラーは説明する。収入源がなくなったことで、ビッスは代替策を探さなければならなくなった。

社会全般のビッス集団に対する今日の関心の高まりに呼応して、ビッスの生計も徐々に改善し始めた。「ビッスがいなければ、結婚式は不完全なんだ」とハスナという名でも知られるムハッラムは言う。インド・ボッティン (Indo Botting) と呼ばれる結婚式からの報酬は、通常、重要なビッスの儀礼を行う費用として使われる。

●危険を承知で儀礼を執り行う

そのほか、プアン・マトア・サイデイのビッス集団は、かつては神聖であったビッスの儀礼の一部を少しずつ一般に開放し始



ビッス（右）は日常でも人々から敬われている
（ラ・ガリゴ公演資料写真）

めた。ただし、ビッスを招いた者はかなり多額に上るビッス儀礼の諸条件を満たす費用を支払わなければならないこと、ビッスの儀礼を見物したい者たちから自発的な給金を支払ってもらうこと、が条件となる。

プアン・サイデイが傷ついた儀礼を見ていた我々もこの条件に従った。儀礼を見終った後、私は儀礼の費用はそんなに高くないだろうと思っていた。しかし、彼らビッスが直面する危険は、プアン・サイデイに起こったことを見ても、実は極めて大きい。おそらくそうした理由からも、ラ・ガリゴ公演のたびに、プアン・サイデイは自ら血を流すことを厭わなかったのだろう。そしてそれは、条件が完全でない場合、常に起こるといふのだ。

「そう、約束したんだからな。きつこうなることは分かっていたんだけどな」と、プアン・サイデイは剣を腹部に突き刺した跡を触りながら言った。「でもしょうがないな。約束したことだから。うむ、危険は自分自身が負うものだからな」。

(Ashtyanto / テレビ番組向け地域文化リサーチャー)

(訳注1) パンケップ (Pangkep) は正式県名であるパンカジエネ群島 (Pangkajene-Keapulan) の省略呼称で、県都のパンカジエネはマカッサルの北、車で約一時間の距離にある。本文のビッス集団が存在するセゲリ地区はパンカジエネの北、マ

カッサルから車で一時間半の距離にある。

(訳注2) イスラーム国家としてのインドネシアの構築を目指して、一九五〇年代（一九六〇年代半ば）にアチエ、西ジャワ、南スラウエシなど各地で起こった武力闘争・反乱を指す。南スラウエシ中・北・東部で多くの地域が戦場となり、コミュニティの崩壊や多数の避難民が生じた。この過程で、イスラーム教とは異なる南スラウエシの伝統文化・慣習などが数多く消失した。

(訳注3) 一種の思想強制を示す表現で、ここでは、ビッスにイスラーム教への服従を強いたものと思われる。地元文化人の一部からは、これまでに、行政も関わる形で南スラウエシの伝統文化のイスラーム化が進められてきたとの指摘がある。

(訳注4) 南スラウエシを中心としたスラウエシ各地に広く伝わる神話的叙事詩で、世界最大級の文学と目される。最も有名なものは、ブギス文字をロンタラ椰子の葉に刻んだ「ロンタラ」で記されたものである。

(訳注5) この公演は、二〇〇五年にシンガポール、ニューヨーク、アムステルダム、バルセロナ、マドリッド、リヨン、ラベナを巡回し、各地で絶賛を博した。世界巡回公演の後、ジャカルタ、バリ、マカッサルで凱旋公演を行った。

〈訳者による解説〉

筆者のアスフリヤントは、現在は民間テレビ局のドキュメンタリー番組の地域文化

に関するリサーチャーをしている。大学時代に考古学を専攻した彼は、そうした仕事の機会を利用して現場に入って調査し、地域独自の文化や資源に関するエッセイをパニシクルへ頻繁に投稿している。

今回、彼が取り上げたビッスとは、ブギスの伝統儀礼を執り行う両性具有の祭司であり、様々な紆余曲折があったにせよ、今日までブギスの王宮文化の継承に貢献してきた。両性具有であるのは、神の使者であるためとされる。剣を体に突き刺す激しいパフォーマンスで知られるが、同様のパフォーマンスは、ジャワ西部のバンデン州をはじめ他地域にも見られる。訳者も以前、ボネ県でビッスのパフォーマンスを見たが、様々な道具を使い、その仕事の一つ一つの意味が込められていることを知った。

彼らを庇護した王国がなくなり、イスラーム教が南スラウエシ地域文化のかなりの部分を占めるようになった現在、ビッスはブギスの王宮文化を継承していけるのか。それとも、結婚式などを彩る「儀礼」として見世物のような形へ向かうのか。

もともと、地域文化として継承されるものの多くは、支配者や貴族の文化であり、ビッスの儀礼もその例外ではない。かつて上流階級のみが享受していたビッスの儀礼を、現代では普通の人々が受け入れて「大衆化した」といえるのかもしれない。

(まつい かずひさ / 在マカッサル海外調査員)